

総会記念講演

なぜ人は「生きる」のか？

～東日本大震災後の人間の生き方を「ゼロから哲学」する～

講師：畠山 創 氏（代々木ゼミナール公民科講師）

プロフィール

早稲田大学卒業。専門は「政治哲学(正義論の変遷)」。「倫理」の講義では哲学的問いを学生に対して繰り返す「ソクラテスメソッド」を用い、数多くの学生に「哲学すること」の魅力・大切さを訴え続けている。代ゼミの講義は全国 1000 校舎以上に衛星放送で生中継されている。予備校以外にもシンポジウムのパネリスト、ラジオや大学での講義を積極的にこなす。著書に『考える力が身につく哲学入門(中経出版)』、『畠山のスパッとわかる政治・経済爽快講義(栄光)』など。

こんにちは。始めに 1 年前の 3 月 11 日の東日本大震災で犠牲になった方々のご冥福をお祈り致します。

今日驚いたのですが、哲学の講演会という誰も来ないのではないかと思いましたが、一般の方にも来ていただいて 80 人近く集まっていただきました。

おそらく去年、科学の限界が見え始めたのだと思います。それに代わるものとは何なのか。そういった意味で急にマイケル・サンデルさんや哲学がブームになっています。西周（にしあまね）と言う人が哲学を作ったのですが、とてつもなく難しいです。そこで今日はゼロから哲学を考えますので安心してください。全部わかります。哲学とは何かがわかりますが、哲学を使わなければなりません。実際この会場全員の方に哲学者になっていただきます。

たったひとつの言葉で

哲学を講義する前に、「人を不安にするものは事柄そのものではなく、むしろそれに対する人の考えである」ヒルティの「幸福論」です。震災後、私の知り合いも原発で避難を余儀なくされました。その時言っていたのは不安であるということです。しかしこの幸福論を読んで少し変わったそうです。たった一つの言葉が人間の何かを変えてしまうことがあります。

2つの目

さて、今日本には 50 基の原子力があります。原子力発電をしてきた事実、そして原子力発電所があったという事実。私たちの目は 2 つあって、今あることをそのまま見る目があります。例えば今現在生きています。「私は生きている (to be)」という、そこに～があるというのが科学です。原子力発電所があるというのが科学です。

では、原子力発電所は発電し続けるべきなのでしょうか。全員、答えはばらばらです。先日早稲田大学で講義をした時、学生は半々に分かれました。今日はあえて原発問題には持っていきませんが、「人がいかに生きるべきか」というこれだけで哲学です。哲学という学問は～すべきという行為です。原子力発電はすべきかという問い論です。

例えば農村よりも都市部の自殺率が高くなっているというように、社会のあるがままの姿を言う時は社会科学。社会がどうあるべきかというのが社会哲学です。投票率が低いなど、政治のあるがままであれば政治科学、政治がどうあるべきかは政治哲学です。

それを人間に落してみると、あるがままであれば保険医協会の場合は医学、あるべき姿であれば倫理です。医者としてどういう判断をするのか、人としてどう生きるべきか。哲学の対象を人間に絞ると倫理学と言います。

私も教育者なので、教育倫理というのが問われます。先生方であれば医療倫理です。

原発に対する菅さんの考え

今日のテーマには倫理が関わってきます。ここでビデオをご覧ください。先日の 5 月 28 日事故調で菅直人さんが次の発言をしました。

「私は 3 月 11 日までは安全性を確認して原発を稼働するという立場で総理として活動致しました。しかしこの原発事故で根本的に考え方を改めました。かつてソ連で恐れられたゴルバチョフ氏が回顧録の中でチェルノブイリ事故は我が国体制全体の病根を照らし出したと述べておられます。今回の福島原発事故は同じことが言えると認識しております。戦前、軍部が政治の実権を掌握していきました。そのプロセスに東電と電事連を中心とするいわゆる原子力村と呼ばれるものが私には重なって見えて参りました。つまり、東電と電事連を中心に原子力行政の実権をこの 40 年の間に掌握して批判的な専門家や政治家、官僚は村の掟によって村八分にされ、主流から外されてきたのだと思います。それを見ていた多くの関係者は自己保身と事無かれ主義に陥ってそれを眺めていた。これは私自身の反省を込めて申し上げております。現在原子力村は今回の事故に対する深刻な反省もしないままに原子力行政の実権をさらに握り続けようとしています。こうした戦前の軍部にも似た原子力村の組織的な構造、社会心理的な構造を徹底的に解明して解体することが原子力行政の抜本改革の第一歩だと考えております。原子力規制組織として原子力規制委員会を作るときに例えばアメリカやヨーロッパの原子力規制の経験者である外国の方を招聘することも村社会を壊す上で一つの手法ではないかと思っております。さらに申し上げれば今後 3.11

| 「哲学」と「科学」 | | |
|--------------------|----|------------------------|
| あるがままの姿 (to be) | 視点 | あるべき姿 (ought to be) |
| 私は生きている。 | 思考 | 私は いかに生きるべきか？ |
| 事実判断 | 判断 | 価値判断 |
| 科学 | 学問 | 哲学 |

社会の→「あるがままの姿 (社会科学)」、「あるべき姿 (社会哲学)」
 政治の→「あるがままの姿 (政治科学)」、「あるべき姿 (政治哲学)」
 科学の→「あるべき姿 (科学哲学)」そのほかにも「教育哲学」など
 ★人間の→「あるがままの姿 (医学など)」、「あるべき姿 (倫理)」

つまり、哲学対象を人間に限定したものを「倫理」といい、
 他者との関連の中で生きる人間の「あるべき姿」を探究する

の原発事故の教訓を日本人私たちがどう受け止めて今後日本の将来をどう決めていくか。一人ひとりの日本人が問われていると思います。根本的な問題としては原発依存を続けるかどうかという判断です。今回の事故で稼働中の原子炉だけでなく最終処分ができない使用済み燃料の危険性も明らかになりました。今回の原発事故では最悪の場合、首都圏 3 千万人の避難が必要となり、国家の機能が崩壊しかねなかった状況にありました。テロや戦争など、人間的要素まで含めて考えれば国家崩壊のリスクに対応できる確実な安全性確保というのは不可能であります。私は今回の事故を体験して最も安全な原発は原発に依存しないこと、つまり、脱原発の実現だと確信致しました。ぜひとも野田総理はもちろんのこと、全ての日本人、世界みなさんにそういう方向での努力を心からお願い申し上げたいと思います。」

これは菅さんのあるべき姿です。原子力発電所は作るべきではないし、やめるべきだと。最初に話したのは首都圏 3 千万人が～という事実です。何を語ったかと言うと、原子力はやめるべきだと言いました。この瞬間政治哲学になります。これはユーストリームから取りましたが、テレビなどでは一切流していない情報です。一方で野田総理は大飯原発の稼働を決めました。つまり、稼働すべきだと言っています。このように原発問題 1 つをとってみても、あるがままの姿とあるべき姿で考えるだけでは全く事実が変わってきます。べき論で語っていくことによって哲学になることがわかんと思います。

哲学のはじまり

次に哲学はどういうときに行われるのかを見ていきたいと思います。

まず 1 つは驚異です。ヤスパースという人はそれまでの認識に対する驚きと言っています。今まであって当たり前の物に対する驚きです。3.11 以降、安全だと言われていたものが安全でないという驚き。そこから哲学が始まると言ったのがプラトンとアリストテレスです。

もう 1 つは懐疑です。科学者たちが行っているのは「本当に地球は丸いのか」などの疑問です。

最後は不安です。被災地の方は特に感じていると思います。

嘘は不正か

今からソクラテスの講演をしますが、嘘は本当に不正なのか、悪い物なのか皆さんと一緒に考えます。あなたはカンニングをしている学生を目撃しました。その事実を大学当局に告げるか迷っています。大学に告げるという方は手を挙げてください。言わないという人は手を挙げてください (多数挙手)。先日京都でやった時は逆でした。嘘を告げるという人が多数でした。ソクラテスは他人の不正は告発しやすいと考えています。例えば事故調がそうです。哲学というのはべき姿を考えていく行為にすぎません。

今度は自分です。自分はカンニングをして大学に入学した。これを告げた場合合格は取り消されますが、あなたは大学に告げますか。告げる人は手を挙げてください。告げないという人（多数挙手）。初めてのケースです。普通は逆になります。自己の不正は告発しにくいですよ。

次に考えたいのは、今あなたは第 2 次世界大戦中のドイツにいてユダヤ人の友人をかくまっています。そこにナチスの親衛隊がやってきてユダヤ人はいるかと尋ねます。真実を告げますか。告げるという人。告げないという人（多数）。難しい問いですが、これは生死を分ける嘘です。こういう場合は不正とは言えません。同じ嘘にも質があります。

このようにあるがままの姿は全部嘘です。論理学では不正・偽ですが、質が全然違います。ソクラテスは問答法を使ってある 1 つのものを疑ってみて本当にいいのか、問答することで彼の哲学は終始しました。「嘘が不正か不正でないかを知らないのに知っていると思ひ込んでいたね」というのが有名な「無知の知」です。

ソクラテスは自分の善は何も述べていません。だから本を残していません。自分が本を書けばそれが定義となってしまうからです。問答の中に大切さを見ました。同じようにカントも「哲学は学べない！『哲学すること』を学ぶだけ」と言っています。あるべき姿を考えることだけです。

ソクラテスの生き方

ソクラテスは全国に哲学を広めた人で、当時の政治家からは狙われました。弟子に告発され、彼の生涯は大変なものでした。サルトルは 2 歳の時に父親を亡くしずっと恨んでいました。この後出てくるレヴィナスはユダヤ人捕虜となって生きて帰った時は街はなくなっていました。親族も亡くなり、彼は漠然と恐怖に襲われます。なぜ自分だけ生き残ったのか、生きていていいのか、生きるべきなのかを考えます。全てを奪われてもなぜ生きなければいけないのか。彼は精神病になりました。その時彼はあることに気づきます。私は哲学者は偉い人と思っていましたが、悲しんでいる人、苦しい人です。

ソクラテスはずっと為政者に恨まれ死刑になり自ら毒杯を飲んで死にました。当時のアテネは国を変えれば死刑は執行されません。都市国家なので自由に行き来できるので国外に出れば良いのですが、それもせず、友人が牢屋を開けたにも関わらず自ら死を選びました。彼は「悪法も法なり」と言っています。しかしこれは法律に従っているのではないと解釈されます。法を超えた自身の倫理を信じて従う、法超越的正義と言います。法に従って何かを決めていくことと、あるべき姿を考えてその法をも越えなければならない判断だったのだということです。

原発事故で注水した吉田所長の判断がありました。法に従っていればいろいろと問題が起きます。しかし現場で規則を超えて判断をしました。ソクラテスが毒杯を飲んだのは法律に従ったのではなく、今まで自分が善を説いてきた責任者として自分の死の中で善を完結したかったということです。生き方の一つとして、古代ギリシャは皆対等ですので、同

じ所に降りて行って皆と議論しながら自ら死ぬという高潔な生き方をしました。人間というのは死ぬ瞬間に何か見えてくるのかもしれませんが。

有名な言葉を紹介します。「教育は文字を書くことだけだろうか」代ゼミで教えていることをひしひしと感じています。今考えていること、それこそが教育ではないのか。

以上、哲学の概略が少し見えたでしょうか。

思考の偉大さ

哲学というのは問うことだということを分かってもらえたらいいです。もっと具体的な哲学者に入ります。パスカルはものすごい天才でパスカルの定理を作った人です。しかし彼は人間における死を考えていました。有名な死の哲学というのがありますが、これから1時間「死」についての話をします。死ぬのがこわいという方は手を挙げてください。こわくない方。なぜでしょうか。こわくないというのはなかなかありません。大体どっちかに傾きますが、これほど割れたことはありません。

夏目漱石の三四郎という小説はご存知でしょうか。あの中に日露戦争に進んでいく日本が絶対にこれは終わるよというセリフがあって、でもね、熊本より東京の方が大きい、東京より日本が大きい、日本より世界が大きい、世界より頭の中はもっと大きいという言葉があります。

パスカルはこわくないを考えている人に近いと思います。必ず死がやってくることは当たり前で、その思考が人間が宇宙、宇宙というのは死のことですが、それを取りこんで乗り越えられる。そこが偉大なのだというのがパスカルの考え方です。

死がなかったら

死がなぜこわくなくなるのか、もう1人紹介します。死に対する別の視点と言って、「もし死がなかったらあなたは人生を努力して生きようとするか？」という問いかけをした人物がいます。ハイデガーという人です。もし仮に死がなかったらあなたは今日から何をするのか。死への先駆的決意性と言いますが、いったんゼロになっています。死は非常にこわいものですが、それが思考によってあるいはゼロから考えることによって、その死に対する感覚が変わってきてしまいます。そういった意味でパスカルの考え方は人間の思考が偉大だというのは思考の中では何をしても自由なんだと考えて、死もきっとやってくるのだから、あえて死を乗り越えていくのは頭の中なんだと考える。

3月11日に震災があった時、あの瞬間に人々は死を選んだでしょうか。多くの肉親が失われても死を選ばずに尊く生きた人間がいます。なぜ私たちは死線を越えても死がくることを知っていても生きようとするのか。そこがまさしく高潔なんです。3月11日以降、一人ひとりがパスカルのように哲学をしていたのだと思います。パスカルはどういう思考で死を取りこんだのか。ここでパスカルに似た人物を先に紹介してパスカルの説明にします。

白血病と闘いながら平和への著作を続けた医師

永井隆という人物をご存知の方いらっしゃいますか。高校の教科書にも出てくる重要な医者です。長崎の医師で、戦時中被爆しました。軍部にフィルムを持っていかれた結果、X線を裸眼でみて研究しながら被曝をなされています。8月9日長崎に原子爆弾が落ち、家も家族も何人か失いました。その後永井先生は自分の被爆を知らながらも無料で被爆者医療を行います。辛かったと思います。それでも自分の人生を被爆者の援護に捧げました。

先生は死期が迫っているのを知っていました。そこで家の隅に「如己堂」と言う2畳の建物を建てました。ここで何をしたと思いますか。白血病でお腹が大きくなる中、手で鉛筆が持てなくなると口でくわえながら、分厚い全集を3つも書きました。

先生は人のために生きるという思考にとらわれています。「平和塔」には「お互いに許しあおう…お互いに不完全な人間なのだから お互いに愛しあおう…お互いにさみしい人間なのだから けんかにせよ、闘争にせよ、戦争にせよ、あとに残るのは後悔だけだ。」と書いています。記念館で撮影してきたものですが、英語、ハングル語、中国語でも書かれており、入場料は100円です。これも先生の遺訓だと思います。さらに「花咲く丘」では「原子戦争はちっとも美しいものじゃない、おもしろいものじゃない、もっともあつけない、もっともむごたらしい、もっとも徹底した完全破壊である。あとに残るは灰と骨ばかり…。心をうつ物語一つない。」と書いています。

科学者が哲学を

京都大学に小出裕章准教授という方がいらっしゃいます。この会のつなぎ役となったのが京都府保険医協会で、3月11日に京都府保険医協会で講演をして参りました。その前日、早めに京都に行って小出先生の講演を聞きました。そこでこれと似たようなこととおっしゃっていました。先生は「原子力の放射線で死んだ人がいるかどうかはわからないかもしれない。けれども、明らかに村の中には避難できず取り残されて45人が死んだ病院、あるいは家畜を放置した結果破綻した生活、逃げ遅れて巻き込まれて死んでしまった人、いろんな人がいて、放射線によって死んだ、死んでないではなくて、原発によって人生を奪われた、変わった人がいることは事実なんです。その評価は科学ではできない。ヒューマニティに関わる問題です。」と書いています。また国会でも小出さんは哲学者のガンジーの言葉を引用しました。私ははっとしました。科学者であるはずの先生が突然哲学を語りだす。科学的には何ベクレルでどうなるかはわかっていないけれど、避難できなくて死んだ人がいる。事故によって死んだ人がいるのだから残しておいてはいけないというのが小出先生の意見です。

人間が汚した海

人間が汚してしまったもの大きさを見ていただきたいと思います。今年3月に仕事で沖縄に行ったのですが、サンゴ礁の写真をとりました。なんで青いか、コバルトブルーが

なぜこんな色なのかわかりますか。これは空の色をそのまま映しているからです。曇った日に行くとそれほどきれいには見えません。東京湾も澄んでいればこんな風に見えるはずです。沖縄にはイノー（内海）と言って自然のサンゴ礁が波をブロックしてくれるので海水浴できたり蛤やもずくがとれたりします。人間が作ったものではありません。

しかし今、東北の港、北海道の函館漁港でさえも風評被害で大変ですし、陸前高田でとれる海産資源もだめになってしまいます。つまり、人間は自然にはかなわないというのが震災でわかったのではないのでしょうか。

東京の人はいろんな所に行かないと見えないことが多いですが、私は北海道出身で東北の良さを知っています。おいしい海産物もたくさんありますが、黒潮にのってやってくるので、全部だめになってしまいます。

科学に限界はあるか

パスカルは科学者でありながら人間が自然に対して有限なのだということを知っていました。デカルトはまた別なので、京都ではパスカルとデカルトを対比させて講演しました。

科学に限界はあるのかを考えてみます。今回の原発事故の原因の一つとして、津波などを含めた被害が想定をはるかに上回っていた、との言葉がよく聞かれる。果たして人間は科学によってすべてを想定することは可能なのだろうか？皆さん、痛いほど不可能だということが分かっていると思います。これを科学がメジャーだった時代、16世紀から18世紀は科学が支配的である、人間が自然を支配できるという考えが主流だった時代でありながら、パスカルは宇宙には勝ることはできない、ただし思考によって宇宙を包むとして死ぬそうですし、考え方によって自然との付き合い方が可能としました。すごく難しいです。

自分の置かれている立場を否定することはとても辛いことですが、パスカルは謙虚にこう言ったのです。これを当時の人たちはモラリストと呼びました。この意味はモラルを持っているというのではなく、常に自己内省することです。いったん止まって科学でいいのか、この教育方法でいいのか、この医療行為でいいのか、この政治の政策でいいのか、自己内省することをモラリストと言います。

考える葦

そういうことを考えながらパスカルの原典を読むと難しく感じないと思います。教科書にも出てくる「考える葦」です。これだけ見るとわからないので、前後関係が分かるように引いてきました。「人間は自然界の中で最も弱い一茎の葦にすぎない。しかしそれは考える葦である。中略 人間は自らが死ぬこと、そして宇宙には勝ることができないことを知っているのである。だが宇宙のほうはというと何も知らないのだ。我々の尊厳は考える事の中にある。そこからすべてを立ち上げなければならない。だから良く考えよう。ここにこそ道德の原理があるのだから。」ということを科学者が言います。だから説得力があります。

パスカルの道徳の原理は永井先生と同じでキリスト教です。キリスト教は愛です。神は愛を無差別に人間に向けます。それを人間が困っている人に差し出すのが隣人愛です。キリスト教は人間に限定しているのですが、仏教は生きとし生けるものすべてという慈悲です。

トレバー君から学ぶ

ちょっと映画を見ませんか。今から流す映画は「ペイフォワード」という映画です。アール中のお母さんを持つトレバー君は社会科のシモネット先生に世界を変える方法を1年間考えなさいという課題を与えられます。他の子は不真面目に取り組むのですが、彼は本気で考えます。そして先生に評価される。長く教師をやっている君みたいなのは初めてだと言います。彼の授業を3分間聞いてみましょう。

(～映画～)

どうでしょうか。ユートピアでしょうか。この先生はユートピアを馬鹿にして彼に言ったわけではありません。これはもちろん映画の世界ですが、彼が言っていることは単純で、自分が3人の人を助ける、その見返りを受け取ってはいけません。その3人がまた別の3人を助ける、3の3乗を何回やれば60億になるか。ものすごく単純な話なのですが、映画ではみんなやってくれません。最後はどうなるか見てのお楽しみです。トレバー君は困っている人を助けるというキリストの原理をわかりやすく説明しています。今必要とされている、日本の中でもできることかもしれません。

パスカルは晩年、厳格なカトリックの教義に従っています。科学者でありながらキリスト教に傾倒していきます。例えば宇宙飛行士が帰ってくると宗教を開くというのはよくある話です。パスカルの生き方から何か学べるものがあればいいと思います。

人間は必ず間違いをします。しかし人間はそれでも考えられます。私たちは神によって死を与えられています。しかしそれを思考で乗り越えられます。パスカルは偉大な人間と卑小な人間の間を無限と有限に分けて整理して、中間者としてそこに立っているという考え方です。科学が支配的だった時代、あえて哲学の授業をするというのが彼の偉業だったのではないかと思います。

2つの精神

今までソクラテスとパスカルを話しましたが、どちらを先生にしたい、話してみたいと思いますか、手を挙げてください。ソクラテスが1/4、パスカルが3/4です。これは象徴的に哲学を物語っています。抽象度が高いと嫌なんです。具体度が高いと哲学が面白くなります。具体的な哲学者を持ってきました。それがレヴィナスという哲学者です。

パスカルに興味を持っていただいたので、1つ紹介したいと思います。人間には2つの精神があります。私たちは物を数で考える、合理的に考えます。Aを数、合理的とします。

ルーブル美術館に行ったことがある方いらっしゃいますか。感動しましたか。それを数

式で表せますか。人を愛したことがある人。数式で表せますか。Bを愛、宗教、神とします。Aは数によって合理的に考えることで幾何学の精神と言います。Bを繊細な精神と言います。彼は2つに分けて、幾何学的に判断することと、どうしてもそれでは及ばない場所があるんだと定理します。つまり言いかえると、科学と哲学の違いです。どちらに傾倒するかということです。自分の生き方を考える時、どちらがいいですか（B多数）。では立場を変えて、自分が医師で患者に診断を下すときはどちらですか（A多数）。パスカルは有意性を説いているわけではありません。ケースによって人間は使い分けていかなければなりません。彼女やルーブル美術館を見る時、数で見ることはしません。愛などは直観的にみます。

哲学を忘れた社会

社会はどうしているでしょう。20世紀になってモラルティの要素が少なくなっています。国際連合が21世紀のテーマとして挙げているのが哲学復権です。20世紀が哲学を欠いた結果、広島長崎に原子爆弾を落とすということを幾何学的にやりました。そこにあるモラルティの問題はどうなのか。原子力発電所もその後出てきました。そこに愛とか神とか有限とか理解できていればまた違った政策決定もあったかもしれません。これは確かに理想論かもしれません。しかし哲学とはそういうものなんです。だから今まで忌み嫌われていたのです。なぜ3.11以降、社会に必要とされたかという、現実が社会に現われたからです。必要性が具体的になったからです。

1人の人間として問われた時、科学と哲学きれいに分けて考えることができますが、社会という空間に放り出され、組織という中に入ってしまうと、哲学を忘れてしまいがちです。マックスウェーバーも同じ指摘をしています。組織構造の中で人間は人間性を失っていく、官僚制と言います。20世紀、私たちは科学を探求してきました。それが合理性を持つから、現実社会との接点が強いから、18、19世紀に確立された近代数学を進め、物理学や化学に転用されていく現象を見ていく中で社会全体が使い分けることを忘れたのではないかというのが国際連合の指摘です。

なぜ今哲学なのか

3.11の時、私たちは不安と脅威の中から哲学を欲しているということがよく言われています。先日も早稲田大学で講義したのですが、人がたくさん来ます。昔はこんなことはありませんでした。震災以降、現実のものとして哲学を取り入れなければいけないという事態に直面したのだと思います。人文学の哲学は日蔭者でした。哲学が怪しくないのは、ちゃんと哲学者が言っていることだからです。哲学というのは原理づけられた思考です。

今自分が持っている理想があります。大体これを社会は否定します。そんな理想、ユートピアだと言われます。そこに原理づけられた思考が入ってきます。哲学者たちはこう考えた。先哲はこう考えたと言えるところが、変な宗教などとは違うところです。ならばできるのではないかという、社会に転用する確信へとつながります。それは自己の確信に

もなるし、他者を納得させる確信にもなります。子どもを叱る時や上司が部下を叱る時、患者と接する時など、様々な局面で理想による物語的概念で語ることが多いです。自己の自分の経験から物を言うことがよくあります。そこに先ほど出てきた 2 人の先哲の考えがあれば説得力が増します。原理づけられた思考こそが今求められています。その原理づけは 2 つの精神や人間が数式でとらえきれない人間性などです。

今、この岩手でこうしたことを考えるというのは大変意義のあることだと思います。被災されて科学の限界を感じた時だからこそ、皆さんの目が真剣なんだと思います。では、どうやって発信するのか。自己の物語的概念や体験だけでなく哲学者の思想があれば、頭のサプリメントのように人に説明したり、確信に変わっていったり、自己を納得させることができるのではないのでしょうか。その意味で最も過激な哲学者に入ります。それがレヴィナスです。

すべてが失われても生きるとは？

市民講座で今までしたことがない人物ですが、すべき人物であると感じました。レヴィナスはフランスの哲学者という印象がありますが、リトアニア出身のユダヤ人です。彼は哲学を専攻して大学を卒業しました。ナチスが台頭し、強制収容所に入れられます。大戦後家に帰ってきます。目の前に広がっていたのは全ての人々の死です。妻子は難を逃れたものの、家族や知人だったほとんどのユダヤ人が命を奪われ、家も壊され、残ったのは焼け野原と自分だけです。レヴィナスの前にあったのは恐怖です。今自分 1 人だけが生き残ってしまった。日本の兵士の証言にもありますが、自分が生き残ったことに対する叱責、これを持っている人が多いそうです。

イリアというフランス語があります。～があるという意味です。何もかも破壊されても世界はただある。なんで生きるのでしょうか。彼は不眠症になります。何度となく精神的な疾患に襲われますし、自殺も考えます。すべてを失ってもどうして生きなければならないと考えたか。戦争により世界では誰もが失われ、何ものが破壊されてしまったかに見える。それなのに、意味もないままやはり世界が存在し続けている。「イリア *ilya*」をあえて否定的に使っています。しかし他者が自分とは取替えがきかない存在として、「顔 (*visage*)」として現れる。そしてその「顔」が倫理的命令を呼びかけてくる。

考えてみましょう。今、1 人であれば裸でいても問題ありません。ここでそれをやったら大変です。つまり、倫理というのは他者がいる時にしか存在しません。他者の存在が倫理が問われる瞬間です。そこで問題なのがレヴィナスが定義する他者とは誰かということです。レヴィナスの周りは誰もいません。全てを失っています。これは 1 冊の本だけでは分からないことですが、参考文献をいくつか挙げておいたので後で読んでみてください。

他者とは

まず彼は最初に他者を死んでいった人々としています。深いです。レヴィナスは不眠の

中で死者が出てきて自分の分まで生きろと命令します。彼はユダヤ教徒でタルムード（聖典）の研究者です。死んでいった人々の分まで生きることによって死者が死者ではなくなります。

私には政治をしていた祖父がいましたが、亡くなりとても辛い体験をしました。しかし、その祖父が「創、生きろ」と言って、私の中に生き続けます。彼はこれを「死に対する勝利」という言い方をします。

次はこれから生まれてくる人々（子どもたち）です。人間は必ず生殖をします。そして子どもができた瞬間、倫理的になります。それは新たに生まれる子どもたちに自分の生を引き継ぐからです。生をバトンタッチするので死にません。

祖父は死にましたが、私の中では倫理をずっと与え続けてくれています。私が自殺しようとするやめろと言ってくる。あるいは私が子どもを作れば私は死んでいないし、死んだとしても子どもが何かを引き継ぎます。さらにレヴィナスはその子どもは自分の子どもだけではないとしています。全ての人類の子どもです。自分が生きた人生の中で接した子どもたちに自分の言葉でリレーします。彼は人間が唯一リレー可能なものは発話であると言っています。つまり言葉を伝えていくこと、声に出して子どもを育てていくこと、声に出して死んでいった人たちを取り込んでいく、そのことによって永遠を生きると言っています。自己の死を他者へとリレーしていくかぎり、自己の死は死として終わりではない。他者の死も死として終わりではない。そのことによって死というものはもはや人類には存在しない。

自分が死にたいと思った時、自分が 1 人ではなかったことに気づきます。自分がもうこんな人生やめてしまおうと放棄した時リレーが終わってしまいます。レヴィナスはこれを考えながら 1995 年にこの世を去りました。彼は何度か自殺をしようとします。ただしすることはありませんでした。むしろたくさん本を書き続けました。しかしそれらは難解です。たぶん、伝えたいことが多すぎて難解にならざるを得なかったのだと思います。難解にしないと説明できなかつたのだと思います。

哲学者をその人が生きた時代と背負ってきた人生を重ねてみると決して良い生き方をしているわけではなく、何か説得力のあるものを感じます。

レヴィナスは「意味ある世界とは〈他者〉がいる世界である。私が享受する世界は〈他者〉によって、意義あるテーマとなる。事物がその使用の意義だけでなく理性的な意義も獲得するのは、私と事物との関係に〈他人〉が関与するからである。 中略 それは発話によって世界を〈他者〉に提供することである」と書いています。

3 人の哲学者の生き方

次に 3 人の哲学者の生き方をまとめてみました。

①人との対話により、善を問い続け生きるのがソクラテス、②自己の有限性を自覚し、愛のために生きるのがパスカル、③失われた人々の生を、自己の生

3 人の哲学者の生き方

- ①人との対話により、善を問い続け生きる
(ソクラテス)
- ②自己の有限性を自覚し、愛のために生きる
(パスカル)
- ③失われた人々の生を、自己の生として生きる
(レヴィナス)

として生きるのがレヴィナスです。

おそらく人間が人間として生きるのは関わること。どういうことかという、私は代ゼミ講師ですが、学生たちと何かをしたり、大学で講演したり、一般講演会を行ったりしています。これは他者がいなければできません。仕事だけであれば、それを否定されてしまえばおしまいです。しかし、今日こうして講演会に来てくださることも関わりの1つです。他にもA、B、Cと関わりを持つことによって、否定されたとしても、他の関わりの中で肯定感ができます。人間という字も関わりです。人間として生きるというのは、いかに物や人や思想に関わるか、関わりの概念だと思っています。それを端的に示したのが仏陀です。

関係性と縁起

仏教論に入ってしまうのですが、この世には実体などありません。この授業も実体はなく、私が話して、皆さんが聞いているという関わりだけです。私がここから出ていけば授業はなくなりますし、皆さんが出ていけば皆さんの中に授業はありません。関わりだけというのは仏陀は諸法無我という世界観です。諸々の物は何もないということがルールです。関係性のみで生成しているというのが縁起です。

この言葉とレヴィナスの言葉を重ねてみましょう。

他者のために存在することは善であることだ。 中略 他者のために存在することは私の善性である。 中略 これが道徳性そのものである。

関係性似てますよね。唯一違うのはこちらはユダヤ教限定ですが、仏陀は事物、草や木も入ります。つまり関わることです。

哲学とは

ここで、歌を聞いていただきたいと思います。私が大好きな歌です。関わりということ的前提で聞いてみてください。しあわせという字をあえて仕合わせと書いています。この歌はレヴィナス、ソクラテス、パスカル、自然とも人間とも関わらなければならない、死者とも関わらなければならない、医師である先生方は糸で縫っているかもしれない、毎日命を救っています。仕合せをしています。この関わりを哲学者は重要視したと思います。この関わりを去年以降、絆と呼ぶのだと思います。この絆が試されているのだけれど、本当の意味で社会に転用できていくのか、それは市民の哲学的思考、これが自分のものになっていくのか、いかに哲学をしていくのかに関わってくると思います。

私自身の言葉ですが、哲学とは次のようなものだと思っています。人は関わり続ける。関わり合うことが「生きていること」。

糸

作詞・作曲 中島みゆき

なぜめぐり逢うのかを
私たちは なにも知らない
いつめぐり逢うのかを
私たちは いつも知らない

どこにいたの 生きてきたの
遠い空の下 ふたつの物語

縦の糸はあなた 横の糸は私
織りなす布は いつか誰かを
暖めうるかもしれない

なぜ生きてゆくのかを
迷った日の跡の ささくれ
夢追いかけて走って
ころんだ日の跡の ささくれ

こんな糸が なんになるの
心許(もと)なくて ふるえてた風の中

縦の糸はあなた 横の糸は私
織りなす布は いつか誰かの
傷をかばうかもしれない

縦の糸はあなた 横の糸は私
逢うべき糸に 出逢えることを
人は 仕合わせと呼びます

関わる量が多ければ多いほどしあわせを作れると思います。

最後にガンジーの 7 つの社会的罪を紹介します。ガンジーのお墓に刻まれているものです。理念なき政治、労働なき富、良心なき快樂、人格なき学識、道徳なき商業、人間性なき科学、献身なき信仰の 7 つです。先哲たちの言葉は胸を打ちます。どうか今日の講演をきっかけにして、入門書を読んで哲学をただ読むのではなく生活の中で実践することで何か関わりが変わってくる、そういう風に思います。岩手という大変な状況にある中、今日ここに来てくださったことに心より感謝を申し上げて本日の講演といたします。ありがとうございました。

ガンジー 「7つの社会的罪」

● ラージガートにあるガンジーの碑文に刻まれた『七つの社会的罪』(Seven Social Sins) ●

1. 理念なき政治 (Politics without Principles)
2. 労働なき富 (Wealth without Work)
3. 良心なき快樂 (Pleasure without Conscience)
4. 人格なき学識 (Knowledge without Character)
5. 道徳なき商業 (Commerce without Morality)
6. 人間性なき科学 (Science without Humanity)
7. 献身なき信仰 (Worship without Sacrifice)